
一月の夜空

灯夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

一月の夜空

【Nコード】

N3537B

【作者名】

灯夜

【あらすじ】

些細な切っ掛けで、想いは蘇り胸を締め付ける。星を見ながら、思い出すのは別れてしまった恋人。母からの電話で帰省することになり、故郷の駅で再会してしまう。それぞれの想いと、恋の意味の物語。

第一話 高台にて

恋はいつ終わるんだろう。

別れた瞬間？

諦めた時？

他の誰かを好きになった時？

どの今までにしてきたどの恋さえも、まだ終わっていないのかもしれない。

明確な一線なんて見えはしないのだから。

昔の恋、けれど想いを手放した後でさえ、時として胸を締め付ける。

季節だったり、天気だったり、時間だったり……。

切っ掛けは、どこにでも潜んでいる。

少しセンチになっている自分に苦笑いしながら、車をパーキングに入れた。

(懐かしい曲だったから……)

ラジオから流れていたメロディーは、キーを抜いたら沈黙してしまった。

「あの人が好きだったもんなあ、この曲」

忘れた頃に耳にする切ないメロディー、未だにタイトルは覚えられていない。

半欠けの月に誘われて窓を開けると、一月の冴え切った空気が流れ込む。

「寒い！」

慌てて助手席の上着を羽織って、高台の空を見つめる。

Wに並んだカシオペア、少し下の小熊座は北極星が目印、オリオンの三つ並んだ星を見付けければ、プロキオン、シリウス、ペテルギウスの冬の大三角はすぐ隣。

付き合っていた三年の間に、星を見る癖はうつってしまったみたい。

(少し、違うかな)

好きな人の事は知りたいて思うから、少しは自分からも星を勉強していた。

あの人は、昔から変わっていたと思う。

人の輪から、少し離れて違うモノを見ていた。

少し人より聡かったせいか、近すぎる距離は嫌っていた気がする。私達二人は家が近くて、ずっと昔から一緒だった。

それでも中学でも高校でも、学校ではそんなに話さない。

あの人、川原 健と話すのは決まって星空の下。

その時には普段の無愛想から一変する、星の話、読んでいる本の事、ちよつとした仕草や表情、凄く生き生きとしている。

私にとっては二人の時は特別だって思えて、それが誇らしくて嬉しかった。

(どうして別れちゃったんだろう)

高校に入ってしばらくたったある日、私から告白して付き合い始めた。

別々の大学へ行き、違う道を進む中で、時間と共に積み重なった些細な変化が二人の関係を蝕む。

ある日を境にメールも電話も不通が続き、気が付いたら別れてしまっていた。

(何で)

確かな理由なんて、無かったのかもしれない。

そう、本当に気がついた時には、すでに終わりを告げられてしまっていたのだ。

少し鼓動が乱される、湧き上がる整理しきれない感情は少し苦手。冷たくて暗いモノが、心を侵食していく。

(大丈夫)

そう自分に言い聞かせ、目を閉じて深呼吸する。

髪を直したら普段の自分、思い出はここに置いて行く。
バックミラーの不安な自分と向き合う。

(バイバイ)

心の中で呟いて、キーを回した。

第二話 母からの電話

大学を出て三年。

この就職難の時代でも、そこそこの会社に入社し出来たのは幸運だったのかも知れないけど、面白みに欠ける人生かなって思う。

(不満は無いのだけど……)

世間一般で言えば、残すイベントは結婚に出産、なんだか気が滅入ってしまう。

大学を出た所で、夢見たような華やかな仕事なんか回ってこない。次回の会議用の資料のコピーを整理しながらそんな事を考えていた。

「高瀬さん」

「はい！」

考えていた事なんて分かりっこないのに、不意に掛けられた声に必要以上に反応してしまった。

「その仕事が済んだらで良いから、開発から回ってきた新薬の実験データを打ち込んでくれないかしら？」

微かに笑いながら、私の上司は言った。

「はい、分かりました」

データ量は多いものの、単純な作業だしミスにさえ気を付ければ楽な仕事。

今日中に済ませられそう。

「それから、仕事中にぼーっとしないの」

最後に付け足すように、彼女は言うってから歩き去った。

「はい」

ぼつの悪そうな顔で、私は彼女の背中に答えた。

「疲れたなー」

髪を乾かしながら、大きく息を吐いた。

部屋に帰って買って来たお弁当を食べる、そしてシャワーで今日を流し終えて、やっと私は私になる。

テレビに手を伸ばそうとした時に、携帯が鳴った。

「もしもし?」

『もしもし、葵』

「うん、何?お母さん」

『何じゃ無いでしょ、そっちらからは全然掛けて来ないから心配してあげてるんじゃない』

「あー、うん、平気だよ」

苦笑いを浮かべながら、私は答えた。

(お正月には帰省したのにな)

『仕事はどうなの?』

つまらないなんて言ったら、勢い付けてしまう。

そうしたら、決まってクラスメイトの誰々は結婚したとかの講釈が始まる。

「平気、上手くやってるよ」

『そう、お正月休みも少なかったし、好景気って言ってもまだまだだからねえ』

「私の会社の経営は問題無いって」

『そうは言ってもねえ、そうそう月末に一度こっちに来なさい』

「急にどうしたの?」

『正月にこっちに来た時はお兄ちゃん達が旅行に行っていたでしょ?お土産もあるし、正月にもてなせなくて申し訳ないって』

兄は既婚で実家に住んでいる。

かえって気を使うので、あまり呼んで欲しくないのだけど。

「いいよ、気にしないで」

『有休はまだあるんでしょう、月末に帰って来なさい』

これ以上の問答は、もはや無意味だと思っ。

「わかった」

渋々と短く答えて電話を切った。

シヨッピングの予定が、とんだ災難に見舞われてしまった。

「結婚かあ」

兄の結婚も、実家から足を遠のかせた原因でもある。

兄のお嫁さんに気を使うのもあるし、彼女は私より一つしか上じやないから、母が結婚を強く進める原動力にもなってしまうている。気は進まないけど、断れもしない。

月末に金曜の夜から二泊三日で帰る事にしよう、せめてもの反抗として有休を使わずに済ませるために。

第三話 電車に運ばれて

仕事を終えてから一度部屋に帰って、旅行鞆を手に駅へ向かう。故郷までは新幹線で一駅とそこから乗り換えて六駅、近くて微妙に遠い。

改札を抜けて、電車へ乗り込む。

空いている席に座って一息ついた。

(有休を月曜から取った事は、母には知られない様にしないと)

多分小言を山ほど頂いて戻るから、次の日はきつと仕事にならないと思う。

発車まではまだ時間がある、ぼんやりと健の事を思い出していた。

高校一年の初夏。

クラスに部活、仲の良い友人が出来て、自分と関わる学校の人の名前が出揃った頃。

仲の良いグループの話題は、専ら好きな人の事だった。

(私は……)

「健って好きな人居るの？」

いつもの様に、星を見上げる彼に何となく切り出してみる。

「急にどうした？」

健は、少し訝しげな表情で聞き返した。

「いや、最近そんな話で盛り上がってるんだけど、健のそういう話を聞いた事が無いし、どうなのかなって思ってる」

何だか随分と唐突にこんな話題を振ってしまった事に慌てて、私は早口で一気に捲し立てた。

「居る」

「そうなんだ」

意外な回答に、熱くなった頭が少しだけ冷静になる。

(好きな人、居るのかあ)

「私が、健の事好きって言ったらどうする」

思うより早く、口が動いていた。

きつと自分で思っている程に、表情は笑っていない。

「本気？」

この告白だけだったらまだ逃げ道はあったのに、彼はそう聞き返した。

「……うん」

躊躇いながらも、私は真顔でそう答える。

「それなら良かった、俺も好きだから」

健は、晴れやかな笑顔でそう言った。

楽しかった頃の思い出。

物思いに耽っている内に、駅に着いてしまった。

新幹線を降りて、中学の時から変わらない懐かしい車両に乗り込む。

そして、終わりの日は早春と呼ぶには早い季節の一本の電話。

『もしもし、葵？』

「健？どうしたの、全然連絡」

『別れよう』

シヨックは意外と少なかった。

最近の連絡の不通。

それに些細な心の距離の変化は、隠していても分かってしまう。

「どうして？」

それでも、こう言わずには居られなかった。

『お互いを取り巻く状況は変わったし、近くに居る訳でもない、これ以上はどっちにとっても良い事は無い』

(お互いにじゃなくて、貴方にとって良い事は無い……そうなんですよ?)

「そう」

『一方的で悪いとは思ってる』

「貴方っていつもそうだよな、こっちの都合なんてお構いなし」

『済まない』

後は、何を言っても何を聞いてもこの台詞しか返って来なかった。電話を切ってから、携帯の履歴を見ても公衆電話特有の番号だった。

掛けなおす事は出来ない。

目的の駅に着くと、無性にやるせなくて溜息が出た。

それでも、冷え込んだ夜の寒さに押されながら改札を抜ける。

不意に、見知った顔に視線が留まった。

うつん、その一点から視線が外せなくなってしまった。

(何で?)

故郷は同じなのだから、こんな事はあるのかも知れないけど、今まで無かったしこれからも会えないんだなって思っていた。

「健」

ポツリと言葉が口をついて出る。

川原 健……忘れもしない、忘れられない、今も好きで、昔別れた恋人。

言葉が耳に届いたのかは分からないけど、健は私を見つけて声を掛けてくれた。

「久しぶり」

別れた事なんて無かったみたいに、自然に穏やかな表情で彼はそう言った。

それが嬉しくて悲しい。

「話したいけど、これから用事があるんだ」

健は、私のそんな感情に気付きもしない様で言葉を続ける。

「後で二人で会いたい、メルアドか番号教えてくれないか？」

その言葉に凄く驚いたけれど、それ以上に嬉しかった。

「携帯の電話番号、まだ変わってないよ」

（アドレス張に残っているの？）

期待が絶望に変わらない様に、予防線を張って置く。

「必ず掛ける」

彼は笑顔でそう言った。

第四話 星空の下

『必ず掛ける』

そう言ったのに、まだ私の携帯は静かだ。

明日にはここを出発するのに。

(そういえば、三日しか居ない事は言っていなかったな)

夕食後に出されたお茶を両親と兄夫婦と一緒に飲みながら、めつきり疎くなったこの町の話延々と聞かされている。

笑顔で話す皆に合わせるように、作り笑いを浮かべて私は相槌をうっていた。

「そういえば、あんたのクラスメイトの美由紀ちゃんも結婚したんだよねえ」

巡り巡って最初の頃の話に戻っている。

逃げようかと思っている時に、携帯が鳴った。

「はい」

『もしもし、葵』

健からだ。

「うん」

『二人で星を見に行った所、今は二十四時間営業のファミレスになっている。こられるか?』

ここからは十分程度。

「すぐに行くね」

そう言って電話を切った。

「お母さん少し出かけてくるけど、遅くなるかもしれないから先に寝ちゃってて平気」

「こんな時間に!」

しかめっ面の母にそう言われて時計を見ると、夜十時を指している。

(そうか、こっちだとこの時間から深夜だった)

「大丈夫、昔の友達」

待ち合わせ場所には、もう健が居て私を見つけると手を上げる。
「入ろう」

ファミレスの光の下で見ると、健が少し痩せた事に気が付いた。
彼に任せて、後についていく。

「何飲む？」

「健はどうするの？」

特に何も要らなかつたから、そう聞き返した。

「コーヒー」

「同じで良いよ」

考えるべき事は多かつたので、そう反射的に答えた。

「コーヒー二つ」

ウェイターに頼んだコーヒーが来てから、話し始めた。

「あれからどうしてた？」

穏やかな笑顔は昔の彼とは大分変わっていて、お互いに過ぎていった知らない時間を感じてしまう。

「んー、特に変わった事はなかつたなあ、平凡に大学を出て普通に就職したし」

私はちよつとだけ笑いながらそう答えて、コーヒーに口をつける。

（苦い）

「そうか」

特に表情を変えずに、彼はそう答えた。

「健は？」

「色々な所を転々としたよ」

コーヒーを飲み干してから、ゆっくりと私の知らない彼の物語りは流れ出す。

「中々実力が認められなくて、虚無感が心の中にいつもあった。進んでも進んでも何も無くて怖くなっていった」

その感覚は、私にもある。

ただ続いていくだけの未来への不安。

まるで自嘲するかの様な表情で、彼は続けた。

「自分に何も無いのが分かって、そして想いが弾けた。あちこちふらふらして、想っていたのは君の事で、そして気が付いたんだ、今でも好きなんだって」

そこで私は、違和感を感じていた。

「質問、私の事は好きなのかな？甘えるのに必要なのかな？」

「好きだからに決まってるじゃないか」

軽く笑って彼は答えた。

「そして生まれ故郷に戻ってきた、そこで葵ともう一度会ったんだ。本当の想いに気が付いていたから、月並みだが運命に感謝したよ」
その後も軽く会話を続けていたけど、言葉の端々から漏れる彼の感情は好きというモノではないと思う。

独りが辛いから、寄り掛かるモノを探している。

一緒に居た時間の長い私に、ずっと過ごしてきた故郷に、それを見ているにすぎない。

会計を済ませ外に出ると、冬の澄んだ大気と星空が迎える。

「もう一度きちんと言つよ、好きだ」

真っ直ぐな瞳が私を捉える、でも……。

(もう聞きたくない)

健は好きの感情を間違えている。

「俺の事を分かってくれるのは君だけだ、やり直そう」

彼は凄く子供なんだ、成長しても。

いつでもベストが出せるほど世の中は優しくない。

自分にとって都合の良い場所が欲しい、それが今の彼の望みなんだと思う。

そして今、独りが嫌で私に甘えようとしている。

「無理だよ」

自分の声なのに、やけに乾いた声だと思った。

「貴方は甘える人が必要なだけ」

重苦しく変わった表情が見える、何か言おうとした彼の唇は微かに動いてから重く閉ざされた。

「私はずっと好きだったのに」

それでも色々な想いが、言葉になって溢れ出す。

「こんな事になるくらいなら、綺麗な思い出のままにしておきたかったのに」

泣きたくないって思っているも心が悲鳴をあげている、堪えられない。

左の頬に流れる涙を自分でも解る。

「こんなのって無いよ」

星を見る癖

いつもの高台へ車を停めた。

「勿体無かったかなあ」

鬱になった気分を溜息と共に吐いたのに、また少し気持ちが沈む。

(けれど、今のあの人の隣には居られない、居たく無い)

胸が押し潰されそう。

「私の事をわかって欲しいのに」

似たような台詞に幻滅した事を思い出して、苦笑いする。

『俺の事を分かってくれるのは君だけだ』

あの人も、きつと誰かに理解して欲しかった、認めて貰いたかった、独りが寂しかった。

でも、彼の我侘に振り回されるのは嫌。

(愛するって難しいね)

今日は車から降りて、手摺まで歩いていく。

眼下に広がる町の灯と、満天の星空は自分が銀河の中に居るような錯覚を呼び起こす。

(だから、私はここが好きなのか……)

白い吐息で、かじかんだ手を温めながら空を見る。

Wに並んだカシオペア、少し下の小熊座は北極星が目印、オリオンの三つ並んだ星を見付ければ、プロキオン、シリウス、ペテルギウスの冬の大三角はすぐ隣。

星を見る癖だけは残ってしまった。

断ったのは、彼の気持ちが好きじゃなくて甘えだったから。

でも自分はどうなんだろう？

自分にとっての好きも、甘えなのかもしれない。

(嫌)

愛する事のラインも曖昧なのに、恋の終わりの境界線なんて私に

は分からない。

もう一度、星を見上げる。

夜空の煌めきに意味を見出すように、恋の意味もいつか見出せるように。

「バイバイ」

ぼつりと笑顔で呟いて、車を出した。

どんな恋にも終わりなんか無い。

実らなかった恋でさえ、いつまでも心に住んでいる。

そう、全てはいつか誰かを愛せるように。

愛する事が分かるように。

星を見る癖（後書き）

いかがでしたでしょうか？

愛する不確かな気持ちは、本当は自分にとってどんな気持ちなのか。そんな事を、大好きな星を絡めて一つの物語にしようと考えました。次回に活かしたいと思いますので、コメントや感想宜しくお願いします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3537b/>

一月の夜空

2008年11月7日07時48分発行